

Essays in Honor of  
Professor Shuntaro Ito at 70

## マイケル・ポランニーのことなど

稻賀繁美

今更時代錯誤な話題かも知れないが、七〇年代半ば、大学紛争直後世代の学生たちにとつて、研究者や教師誰彼の名声を慕つて特定の大学を選ぶなどという美談は、すでに過去の物語りに過ぎなかつた。受験産業と大学市場との交流欠如もあって、関連する教科が高校までに存在しない領域の場合、現在誰が活躍中の学者であるか、といった情報は、およそ入手し難かつた（最近でこそ『学問の鉄人』といったものも編まれているが、折りからの大学改革による専攻の不透明化や、学会組織との齟齬ゆえに特定の領域がごつそり脱落し、それに内輪裏めの相互推薦の気味もあって、せいぜい「ご参考」になる水準に過ぎまい）。教壇に立つてはいる、言語不明瞭で風采のあがらぬ先生が、実はノーベル賞候補だ、と諭されて、学生一同が思わず大笑いした、といった「不謹慎さわまる」風景に慨嘆された

東京大学駒場教養学部の理系の先生もおられた筈だ。そんななかで、無知な田舎者であつた当方も、伊東俊太郎という名前だけは、例外的に大学入学当初から知つていたようと思う。『朝日新聞』で當時話題だったコラムに、林健太郎氏が、発刊されたばかりの『都市と古代文明の成立』を絶賛する記事を寄せられていた。また中東滞在のため半年遅れて開講された板垣雄三助教授（当時）は、高校までの常識を破る「東洋史」（だつたと記憶する）でパレスティナ問題などを縦横に論じ、無知な元受験生たちのど肝を抜く充実した授業をされていたが、何かの折りにふと伊東俊太郎先生の名前をお出しになり、「この先生は、おえらい、おえらい方です」と、心からの賛嘆を込めて言及されたことも鮮明に思いだされる。思えば当時、先生はまだ四十五歳。少壯の助教授、紛争後<sup>後</sup>に発刊された、あの歴史的な『教養学科紀要』第一号の論文も眩しかつた。

マイケル

カリキュラム上履修権利のないクラスに「潜る」などという初等戦術すら知らなかつた世間知らずが、ようやく「ご馨咳」に接したのはいつだつたか。鮮烈な記憶の残るのは、全学一般教育ゼミナルという全学共通の少人数ゼミのこと。あれは一九七八年だつたか、カール・ポランニーの、まだ翻訳もなかつた *The Tacit Knowledge* をあの時期に（湿性青焼きコピーで）読めたのは返す返す僥倖だつた。ベルグソンの比喩でいうなら、頭のなかに机の引き出しそろしく知識が整理されているようなタイプの明晰秀才とは程遠い自分の頭脳の暗黒の闇に当惑していた青年にとって、暗默知へのポランニーの洞察は、文字通り靈感となつた。ひとつの体系が明晰で透明なものとなるにつれて、それはその外部をいやおうなく闇に塗り込めて行く宿命であることも、ここで学んだ。これは、同じころ中山茂経由で仕入れたトマス・クーンのやや平板なパラダイム論に、さらに立体的な次元をつけ加える

教えた。その後大学教育の改革を巡る議論の席で、専門家 (Fachman) たちが、学際的研究を毛嫌いする現場に立ち会って、なるほどと納得もできたものだ。加えて大学に入學して始めた合氣道というのも、言語的説明には馴染まない心身感覺を、意識化して技法に練り上げては無意識に返す反復稽古を主とするものだつた。最初は戸惑つたその練習がやがて腑に落ちたのも、思えばボランニーのお陰。精神分析の我流の「誤解」ともない交ぜになり、今では体内の深い部分に受肉したような実感を抱いている（ついでに言えば、その後阿部良雄先生の薰陶で接近したピエール・フランカステルに嵌まる一方、ピエール・ブルデューの *habitus* 概念には、身体感覺としてなにか食い足りない面を抱かせる原因ともなつた。その顛末は、廣松涉先生のご推薦で『状況』の丸山圭三郎追悼号に寄稿して言及した）。

次の学期は、エドモンド・フッサールの『危機』（伊東先生は「フッセル」と発音された）。要するに「○○主義」という記述が悪口なのだ、といった初步的な読解の鍵がなくては、フッサールが何と闘つているのか、ウブな読者にはいくら真面目に邦訳と格闘しても皆目不明な次第。一回で学生全員の名前を暗記された先生の「記憶術」とともに、改めて伊東式教育の有り難さが身に染みる。たまたま由良君美先生の授業でポランニーの *Personal Knowledge* が話題になり、偉そうに知ったかぶりをした。キミなぜそんなこと知つているノ、と問われて伊東先生のお名前を出したところ、由良師がいたく感銘深げに納得しておられた様子も彷彿とする。思わず懐かしい情景が脳髄に溢れてきて困惑の体。顧みれば、まことに良き師、よき教育に恵まれていた。總じて駒場の何年かは、専門領域に埋没することのない知性の領域横断の術を実地に教えて戴いた、貴重な修業時代 (Lehjahr) だったのだ

と、今にして思う。

続く遍歴時代を経て帰国した翌年だったか、ふいに比較文明学会からお誘いがあつた。もはや時効だらうから暴露すれば、「諸文明の東西觀」といった話題でシンポジウムを催すのに、元来イスラーム圏を報告する予定であつた片倉もと子氏のダブル・ブッキングが判明してご欠席、なぜか面識もない当方をご指名とのこと。甚だ当惑したが、未経験の怖いもの知らずで会場に乗り込んだところ、迂闊にもそこで、ほかならぬ伊東俊太郎先生が会長であられることに気づき、文字通り「恐縮」した。なにしろ当方は語学の才能のあまりの欠如に、アラビア語の習得などハナから諦めていた門外漢である。思い出して身の竦む惨状だったこと、疑いない。だが伊東先生は最後の総括で、当方のシドロモドロの提言を汲んでくださつたものか、地球を東だ西だといった指標で区分けする思考そのものの破綻を高らかに宣言された。乗り越え難い巨峰の前で、せめてもの恩返しのまねができる、やつと少しだけは安堵もできた。もつともその折の恐怖の外傷ゆえか、以来イスラーム絡みの公開講演に招かれる度に、冷や汗が出る。それでも懲りない不勉強者、ひたすら恥じ入るしか能がない。

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授)

伊東俊太郎博士古稀記念文集（非売品）

編集（代表）川窪啓資

立木教夫

保坂俊司

麗澤大学比較文明研究センター

千葉県柏市光ヶ丘二一一一

電話〇四七一(七三)三七六一

発行日 平成一二年四月二十五日

（株）行人社

東京都新宿区早稲田鶴巻町五三七

電話〇三(三三〇八)一一六六